

# 女子高等教育史に新たな地平を拓くために

——『津田塾大学一〇〇年史』編纂を機に学外資料を収集する——

樋口 朗子

はじめに

序章 大学アーカイブズをめぐる今日的情況——津田塾大学のケースを中心に——

第一節 日本の大学アーカイブズをめぐる今日的情況

第二節 津田梅子資料室の沿革

第三節 活動と所蔵資料

(1) 活動——オーラルヒストリー・個人資料・テーマ別資料収集など

(2) 所蔵資料

第一章 『津田塾大学一〇〇年史』編纂と学外資料収集活動

第一節 『津田塾大学一〇〇年史』編纂事業

(1) 一〇〇年史編纂への津田梅子資料室の協力

(2) 女子高等教育史に新たな地平を拓くために

第二節 史実調査および資料所在調査の中で

(1) オーラルヒストリーの収集

(2) 何を集めるのか——藤田たき資料・女子留学生関係資料

第三節 第四代学長藤田たき資料——個人資料収集

(1) 藤田たきについて

(2) 収集

(3) 整理

(4) 公開——企画展・シンポジウムとのタイアップ

第二章 一〇〇年史編纂の後——女子高等教育史を詳らかにする

第一節 ガリオア・フルブライト女子留学生関係資料——テーマ別資料収集①

(1) ガリオア留学

(2) 収集

(3) 整理・公開

第二節 日本婦人米国奨学生関係資料——テーマ別資料収集②

(1) 日本婦人米国奨学金

(2) 収集・整理・公開

第三節 今後の課題——学外資料収集活動の円滑化に向けて——

(1) 同窓会との連携

(2) 学外ネットワークキングにむけて（大学婦人協会など）

おわりに

参考文献

## はじめに

近年、さまざまな組織、団体などが自らの記憶装置として記録を保存し利用に供すアーカイブズの存在および必要性が認知されつつあり、機関の設置が進んでいる。

アーカイブズの運営に関する議論は公文書館界などを中心に発達し、公文書館の扱う地域古文書の保管や、非現用となった行政文書をいかに秩序をつけて保管、公開するか、あるいは半、現用文書を含めた文書保管サイクルをいかに構築するか<sup>①</sup>の議論が重ねられてきた。

大学アーカイブズにおいても、以上の議論や個人情報保護法制定の動きを受け、学内文書<sup>②</sup>におけるライフサイクル構築の必要性が認識されはじめ、その試みも諸大学においてはじまっている。

同時に大学アーカイブズは、その活動が大学史の編纂と密接に関わってきた。そのため史実調査に資するための合目的な資料収集にも力を入れてきた。そしてその際に求められる資料は、勤務する津田塾大学のような個人の尽力と協力で立って立ってきた私立大学においては、学外資料<sup>③</sup>であるという認識も大きくなっている。

アーカイブズの中では比較的歴史の短い大学アーカイブズが、今後、近現代史における大学像の構築に資し、大学の未来を構想するヒントを豊富に与える場になることを目指して活動を広げようと考えれば、資料収集の範囲の企画は各々の機関において方針の根幹を定めるといつてもよいであろう。

大学アーカイブズ学の重要な議論の場である全国大学史資料協議会においても、以上の観点は了解されている。二〇〇一年の全国研究会では、大学アーカイブズの収集資料について再考され、「原則的に、大学が機関として定

められた規則や政策、行った調査研究等が収録されている行政文書や学内印刷物が中心となる」(西山伸「京都大学文書館―設置・現状・課題」全国大学史資料協議会西日本部会「研究叢書第三号 大学アーカイブズの設立と運営―二〇〇一年度総会および全国研究会の記録―」全国大学史資料協議会、二〇〇二年、二七頁)としながらも、同時に個人資料など学外資料も軽視してはいけなさと共通理解がなされた。

本学は一九〇〇年の創立以来、創立者津田梅子を中心とした日米の女性たちが個人の自発的な力とネットワークを駆使して開学し、運営してきた私立の女子大学である。その足跡を鑑みれば、大学を支えてきた彼女たちの個人的な資料が本学史に欠かせない。つまり、本学アーカイブズである津田梅子資料室の活動について、学内資料のみならず学外資料の収集保存業務に重点がおかれていくことになった。本学では、一〇〇〇年史編纂を機に再考され、現在の資料室における資料収集方針の大枠がこのように定められた。

本論では、学外資料収集の観点から、近年の大学史編纂についての議論や大学アーカイブズ学の動向を把握しながら、津田梅子資料室での実践を報告したい。具体的には、限られた予算や人的資源の中で、重点的に行っている学外資料―特にオーラルヒストリー、個人資料、テーマ別資料―の収集活動について述べてみたい。特に比較的規模の小さい大学や女子大学の擁する大学史資料室において、今後共有するであろう課題に対する現場報告と位置づけたと思う。

## 序章 大学アーカイブズをめぐる今日的状况——津田塾大学のケースを中心に——

### 第一節 日本の大学アーカイブズをめぐる今日的状况

日本の大学史編纂事業は大学の歴史と歩みをともしてきた。諸大学では創立以来の節目の年ごとに、記念事業の一環に記念品のような意味合いで年史が発行されてきた。しかしそのため編纂関連事業は継続性を有さず、学内外の収集資料もその場限りで終了し、事業の終了後には常に散逸の危機にさらされていたといつてよい。

しかし現在では、大学史への捉え方に変化が生じている。従来のように制度史への偏重や創立者や学長らの賞賛にとどまらず、近現代史研究の成果を積極的に採用して大学像を客観的に表現しようという意図や、学生や地域といった新しい視点からの議論を含めていこうという姿勢が重視されている。

以上のような「大学史」観の深化と連動する形で、大学アーカイブズを必要とする声が高まってきた。こうして大学アーカイブズについての議論も盛んになり、やがて大学史編纂業務とは独立した継続した業務としても考えられ始めた。そして特に国公立大学においては、個人情報保護法制定も影響を与えていよう。

大学アーカイブズの収集すべき資料については、現在では以下の一〇点であると考えるのが大体の共通理解となっている。<sup>③</sup>すなわち、①大学運営の歴史を示す公的文書、事務記録など、②大学内諸機関の議事録、答申、報告書など、③大学刊行の年報、要覧、新聞など、④大学卒業生の卒業証書、アルバム、講義ノートなど、⑤教職員などの私蔵する文書のうち特に大学に関するもの、⑥大学設立者、寄付者など関係者の文書、⑦大学の歴史を示す物品（記章、記念品、制服など）、⑧大学に関する写真、音声テープ、フィルムなどの資料、⑨大学史に関する諸刊

行文献、⑩学問史的な意味を持つ研究室製作物、実験器具などである。大学の理念に歴史的根拠を与え未来の構想に資するものという観点から、今も実践の中からの議論が繰り返されている。

## 第二節 津田梅子資料室の沿革

津田塾大学の大学アーカイブズとしての津田梅子資料室の歴史は浅い。設置は一九八〇年にさかのぼるが、広く資料の収集・整理・公開業務を開始したのは、創立百周年を迎えた二〇〇〇年度である。

資料室は、一九八〇年の創立八〇周年に図書館書庫が改築された際、創立者津田梅子関係諸資料を一箇所にまとめたいと付設された。こうして学内の数箇所に置かれていた津田梅子蔵書本箱や同窓会会報ほか、関係書類の戸棚を運び込んだ。また一九八二年には金庫を購入し、総務課の大金庫に納められていた津田梅子の衣類など遺品類を移管した。

その後、梅子の伝記や『津田塾大学六十年史』など長く本学史執筆を手がけていた山崎孝子教員が一九八三年に退職する際、梅子の父仙の関係資料などを寄贈した。この時、ステイール戸棚上下四組、ヴァーティカルファイル六台、大テーブルが用意され、レファレンス業務を開始した。創立八〇周年の記念出版物『津田梅子文書』はこの時までには揃えられた資料を基に刊行された。

大きな契機となったのは、一九八四年、偶然に本学キャンパス内で発見された大量の津田梅子直筆書簡群の整理、保存業務であった。発見された資料は四四〇通余に及ぶ。長く本学を支えた教員アナ・ハーツホンが、梅子から自伝と本学史執筆を依頼されていたものの太平洋戦争下の時局により一九四〇年に帰米する際に、キャンパスに残していった資料群である。その後、直後に発見されたアナ関係諸資料の整理とあわせ、資料整理は一九九一年ま

でかかり、これが大学百年史業務の始まる以前の資料室の主な資料となった。<sup>(4)</sup>

一つの大きな契機は創立一〇〇周年事業の開始であった。二〇〇〇年に創立一〇〇周年を迎えるにあたって、資料室は、収蔵庫二部屋、展示室、事務室を擁す現在の形態にリニューアルされた。同時に制度面での整備も始まった。一〇〇周年を迎えるにあたって記念事業委員会および事務局ができ、記念式典事業担当と一〇〇年史編纂事業担当にわかれて業務を開始した。同時に二〇〇二年度の大学一〇〇年史編纂業務終了後を想定して、編纂に使用した資料を引き継ぐ部署として津田梅子資料室のあり方について議論が浮上し、二〇〇〇年度より津田梅子資料室準備委員会（一〇〇周年事業委員会の下部組織）が発足した。のち二〇〇一年度より独立した運営委員会に改組し、現在にいたっている。資料室長が置かれたのも二〇〇一年度からである。現在は、室長は一名で本学教員が二年交代でその任に就いている。運営委員会は各学科（英文学科、国際関係学科、情報数理科学科）から教員一名ずつおよび資料室職員で構成され、資料室の活動方針を議論、決定する場とした。資料室職員は現在二名（専任一名、嘱託一名）である。

### 第三節 活動と所蔵資料

（１）活動——オーラルヒストリー・個人資料・テーマ別資料収集など

二〇〇〇年度に発足した準備委員会において、資料室の活動の目的を、創立者および周辺資料、卒業生、大学関連資料の収集、整理、保存、公開と定めている（なお一〇〇年史編纂の終了した二〇〇三年度以降、女子高等教育関連資料および日米交流史関連資料も対象範囲に含めた）。上記の業務万般を遂行できればよいのだが、比較的規模の小さな資料室のため、予算や人的資源の面で制約がある。そこで重点業務を定めながら少しずつ行っていると



いうが現状である。現在は学外資料収集と企画展示が重点業務になっている。

収集については後述するが、一〇〇年史編纂を契機に、本学をはじめとした女子高等教育史を詳らかにする目的で、テーマを設定し「集めたい」資料を狙い定めて(?) 所在調査・収集しようと心がけている。具体的には大学関係者のオーラルヒストリーや個人資料、あるいはテーマ毎に関係者らに資料を募って広く集める作業(ここで便宜的に「テーマ別資料」という)に力を入れている。

上記の収集資料と連動される形で、一般公開事業としての企画展開催にも力を入れている。<sup>(5)</sup>二〇〇〇年度より開始した企画展は、年度毎にテーマを替えて開催しており、初年度は創立一〇〇周年を記念し「キャンパスライフの一〇〇年」展を実施した。以後は、収集した資料に沿うテーマで展示会を企画するよう努めている。<sup>(6)</sup>そうすれば、収集した資料を広く見て頂け、またより広く収集の重要性への理解を広めるきっかけにもなるうと思うからである。そして時には、双方の予算枠を使つて作業を進められるという、主催者側の便利にも働いている。他にも二〇〇一年度からは教育研究活動にも着手し、企画展と同テーマのシンポジウムをもっている。<sup>(7)</sup>

また資料保存活動についても、破損の激しい資料のメディア変換を中心に二〇〇〇年度より展開している。例えば一九〇一年より七年間本学の発行した英学雑誌『英学新報』『英文新誌』の脱酸処理、一九三一年より一九七四年にかけ刊行した中等英語教育テキスト類「津田リーダー」、『同窓会会報』(一九〇五年より一九五〇年)、『津田英学塾四十年史』のCD・ROM化を行った。非文字資料では、一九一四年に録音された梅子の卒業式スピーチLP(蓄音機用)を、音声復元作業を施してCD化している。このように、限られた条件下、またレファレンス対応といった日常業務に追われる毎日ではあるが、効率的に戦略的に、という姿勢で日々作業に携わっている。

## (2) 所蔵資料

現在の所蔵資料の範囲は先にも触れたが、津田梅子および周辺の資料、教員および学生関係資料、卒業生および本学関係者に関する資料、女子高等教育関係資料および他大学史関係資料のほか、未だシステムの構築はなされていないが諸部署から移管された大学作成の非現用学内資料である。

その総点数は、現在のところ概算のみの把握であるが、およそ二五、〇〇〇余点である。内訳は、非現用行政文書は約八、〇〇〇点、個人資料一〇、〇〇〇点、大学発行の印刷物二、〇〇〇点、図書二〇〇点、創立以来の卒業写真や学生生活を写した写真資料五、〇〇〇点、その他（ビデオ、レコード）五〇点となっている。

しかし、積極的な資料収集は二〇〇〇年度の資料室準備委員会設置（二〇〇一年度に資料室委員会は一〇〇周年記念事業委員会より独立）以後に始まったばかりで、いまだ本学史を豊かに表現するような資料群を形成しているとはいえない。それ以前には、統一した方針に沿った積極的な資料収集活動はなされず、「(1) 資料室の沿革」でも述べたように、キャンパス内で偶然に見つかった資料群や退官教員の好意による寄贈資料を受け入れて保管してきた性格が強かったためである。

主な貴重資料は大学を支えた女性たちの個人資料であろう。津田梅子の遺品類と、一九八四年にキャンパス内で偶然に見見された「津田梅子関係一次資料」（書簡類、留学中の学業関係文書、講演など寄稿原稿類、大学創立関係資料など）といった、創立者関係資料がその中心である。ほかに大学史の編纂に関わった教員からの寄贈資料群（「山崎孝子収集資料」、そして二〇〇一年度に収集された第四代学長藤田たき関係資料である。これらは、資料群別に各々の独立した冊子体（一部データベース）目録を作成している。

## 第一章 『津田塾大学一〇〇年史』編纂と学外資料収集活動

### 第一節 『津田塾大学一〇〇年史』編纂事業

#### (1) 一〇〇年史編纂への津田梅子資料室の協力

創立一〇〇周年事業の終了後、傘下にあった一〇〇年史編纂担当課は百年史編纂事務室として独立した。同時に、執筆者や編纂者から成る一〇〇年史編纂委員会も独立発足し、記述内容や編集方針についての審議決定機関となった。

同時に記念事業の一環としてリニューアルされた津田梅子資料室も、事業事務局から独立した。しかしながら必然的に資料室は諸資料提供や史実調査の面で、編纂事業に全面的に協力する体制を敷いた。そしてこの作業こそが、資料室員にとって資料室の理念や重点事業、ひいては所蔵資料の範囲を再考する契機となった。収集に一貫した方針をもつ必要性も再認識し、社会史における的確な自校史の位置付けのためにも、学外資料の収集が欠かせないという共通理解がうまれた。

#### (2) 女子高等教育史に新たな地平を拓くために

一〇〇年史編纂委員会では、女子高等脅教育史における本学史の位置づけと表現が企図された。具体的には開学以来、大学を支えた女性たちのネットワークを辿り、その意味を再考しながら編纂を行うものである。そして本学の位置付けを行うと同時に、女子高等教育史に新たな地平を拓きたいという方針が再確認され、資料収集について

も以上の方針に沿った積極的な展開が求められた。

本学は、津田梅子が留学して出会った米国の女性たちとの支援ネットワークを活用して創設された、日本で最初の女子高等教育機関の一つである。また、第二次世界大戦後には星野あい校長（一九四三年より四八年まで津田塾専門学校）が教育刷新委員会における唯二人の女性委員の一人として、また大学基準協会女子大学部会の委員として、新制女子大学創設に大きな役割を果たした。同時期には本学教員の藤田たき（のち第四代学長）が日本大学婦人協会の初代会長に就任している。こうした日本の女子大学の歴史における大きな節目での本学および本学関係者の足跡を詳らかにすることが、今回の編纂の使命であると捉えられた。資料室も明確な方針の下での学外資料収集の課題に向き合い、また作業の効率化や工夫の試行錯誤も始まった。

## 第二節 史実調査および資料所在調査の中で

こうして一〇〇年史の編纂方針に添った学外資料収集の取り組みを始めた。まずはどの時代の資料収集に力点をおくかを見定める必要があった。そのために百年の間に多様な形で大学を支えた日米の女性たちに関して、どのような人物の資料がありまた不足しているのか、学内所蔵資料調査を行った。

その結果、開学時代については、必要を充たす程度に所蔵されていると確認された。創立者津田梅子関係資料をはじめ、一九四〇年まで梅子の片腕となつて教鞭を取ったアナ・ハーツホンの関係資料群が保管されている。また梅子の創設した「日本婦人米国奨学金」（一八八九年より一九七五年）についても日米両委員会の資料が二〇〇点存していた（いずれも未整理。近く公開の実現するよう整理したい）。他にも関東大震災の際に本学教員と米国女性たちにより設立された「女子英学塾臨時救済委員会（通称フィラデルフィア委員会）」資料群も、カリフォルニ

ア・バークレー校所蔵の史料コピーをはじめ、ある程度収集されていた。

こうした調査結果から、第二次世界大戦前後およびそれ以降に焦点を当て、本学史および女子高等教育史におけるターニングポイントとなるトピックに添った、しかし幅を持たせた収集活動を開始することにした。以下で活動の実際を振り返りたい。

### (1) オーラルヒストリーの収集

第二次世界大戦以降の本学は、どのような事柄をターニングポイントとし、そこにはどのような営みがあったのか―準備作業として、テーマの所在把握のために大学関係者のオーラルヒストリーを集めることにした。インタビューを重ねることで公的記録に残っていない史実情報を得られるであろうし、また多様な視点から大学史を再検討したいねらいもあつたからである。

オーラルヒストリーの収集は、もともと創立八〇周年記念事業で始まった。これまでに計一五回四三人の方にお話を伺い、内容を記録保存している。一四回分については『津田塾大学オーラル・ヒストリー・シリーズ』として冊子体になっている。当初は、古い卒業生から順次お願いする企図のようであつたが、この機にテーマ性を持ったインタビューへと方針を転換した。本学史は勿論のこと、教育史および広く現代史における転換期に大学で過した関係者たちに、インタビュー依頼をはじめた。

たとえば、国際関係学科の設立（一九六九年）の経緯を当時の教員にインタビューしたり（『津田塾大学オーラル・ヒストリー・シリーズ』第七号）、当学科増設時代に学長を務めた藤田たきとその同期生を集めてライフヒストリーを伺ったり（同第八号）、また当学科設立に先立ち英文学科に設けられたアメリカ文化研究コースを牽引した当時

の教員へのインタビューを行った。他に、戦時中の学生生活を伺う目的で、一五年戦争中に学生時代を送った学生へのインタビューを実施した。

元教員へのインタビューは、室員が理事会記録を読み返してトピックを選定し、人選を行って依頼した。また学生生活に関するインタビューの人選は、同窓会の人脈を活用した。テーマを同窓会事務局に打診し、同窓生を紹介いただく形をとった。インタビューをお願いした人びとには、あらかじめ作成した質問事項の大枠を通知したり、本学史や一般史年表、および当該時期の同窓会誌の記事コピーを資料として送付した。こうして大学に参集いただき、また時には地方に出向いてインタビューを行った。これらは記録として音声テープに録音するとともに、文字に起こし、それぞれ冊子体にして利用のために供している。また文字に起こした際のデータは、テキストファイルにして保存した。

## (2) 何を集めるのか——藤田たき資料・女子留学生関係資料

集められたオーラルヒストリーは、大学の営みが関係者の心情を伴って伝わってくる資料となった。室員を含めた編纂委員会で読み進めるうち、戦後における本学史の特徴として以下の二点が改めて印象に残った。まず創立以来重視されてきた英語教育の享受がどの学生にも印象深く刻み込まれている点（一九四三年時点で、卒業生の四分の一が英語教職の道を歩んでいる）、そしてこれと関連して米国をはじめ海外留学が奨励され、異文化交流が盛んな歴史を有する点である。

同時にどのような学外資料を集めたいかについても方向性がみえてきた。一つには、異文化交流のあり方を社会科学の見地から問い学ぶ国際関係学科を増設した第四代学長藤田たきに関する資料、二つには戦後の女子の留学状

況を表す資料である。前者は個人資料であり、後者はテーマ別に広く関係者に募る形をとる。具体的には、本学と最も関わりの深いものとして、梅子の創設し一九七五年まで続いた日本婦人米国奨学生関係資料と、戦後初めて実施されたガリオア・フルブライト奨学生卒業生関係資料である。以下に具体的な取り組みを、検討を加えながら記録したい。

### 第三節 第四代学長藤田たき資料——個人資料収集

#### (1) 藤田たきについて

藤田たきは（一八九八—一九九三）は、第二代労働省婦人少年局長（一九五一—五五）や女性初の国連総会政府代表（一九五七）、また第四代本学学長（一九六二—七三）を務めた。女性の社会参画を夢見、国際的な舞台でその実現に情熱を傾け、戦後の教育及び社会運動の世界で尽力した。まず資料調査に先立ち彼女のライフヒストリー把握に着手した。

一九二〇年に本学を卒業したたきは、梅子創設の日本婦人米国奨学金を得て米国に留学し、プリンマー大学で女子大学における高等教育を体験した。帰国後、本学で教鞭を取り、欧米の文化や自分の体験を学生に伝え教育への意欲を燃やした。一九二八年にホノルルで開催された第一回汎太平洋婦人会議では、生涯の友市川房江に出会い婦人際政権運動にも参加した。

第二次世界大戦後には、活動舞台はさらに広がり、労働省婦人少年局長、国連婦人の地位委員会や国連総会の代表、汎太平洋東南アジア婦人協会や日本婦人有権者同盟、日本大学婦人協会の会長を歴任し、日本社会の民主化と女性の地位向上に献身した。一九六二年からは本学学長の任にあり、大学院の設置、国際関係学科の増設を実現し

た。辞任後も婦人問題企画推進会議座長や婦人少年問題審議會会長として、女性差別撤廃条約批准や男女雇用機会均等法の成立に尽力するなど、男女共同参画社会の実現に寄与した。

こうした二〇世紀のさまざまな場面で先駆的な役割を果たした藤田たきに関する資料から、改めて本学の戦後史を明らかにしたいと考えた。

## (2) 収集

藤田たきの資料は、所有者から労働省時代の後輩にも当たる本学卒業生が整理のため預託されていることが分かった。お二人の賛同と協力を得て、資料室への移管のための作業を始めた。

まず資料収集についての説明をお二人との談話会でさせていただいた。大学が資料を保管することの意義や、公開・活用のあり方についての方針について理解をいただくためである。個人所蔵の資料収集には、こうした作業は欠かせない。一カ月後、預託者の自宅を訪ね、資料把握のための調査を行った。たき蔵図書や直筆原稿、国連総会の議事録などダンボール三箱分を宅急便にて資料室に送った。また諸活動を示すアルバム七冊におよぶ写真資料もあわせて寄贈いただいた。あわせて預託者を二度にわたって訪問し、資料群構造の把握や整理方法の聞き取り調査も行った。

## (3) 整理

資料の構造は以下のものであった。藤田たきの伝記<sup>⑧</sup>を作成するために、資料は整理しなおされていた。①米国留学時代、②労働省時代、③本学学長時代、④国連での活動期、そして⑤諸女性運動やNGO活動に関する資料に大



別されていた。そのため藤田たき本人がどのように資料を作成し保管していたか今となっては知ることが出来ない。したがって、整理者の手になる資料の保管形態を「原形」として整理することにした。収集後、百年史編纂委員会には大要の目録を作成して提出したが、本格的な資料整理は、他業務に忙殺されて二〇〇二年一月までかなわなかった。

整理は、上記に述べた各分野別にグループ番号を付し、その下に個別資料番号を付して、一点ごとにファイリングした。この作業はまだ途上であり、ファイリングに際しても、中性紙封筒の使用はまだ全資料の五分の二程度にとどまっている。目録作成に際しての一点一点の資料データ項目は、一九九八年に中央大学大学史編纂課の考案、採用した「中央大学大学史編纂課受入資料原簿入力基準」を参照させていただいた<sup>⑨</sup>。すなはち、項目には以下の一一項目を設定した。①整理番号（ただし全資料の番号ではなく、藤田たき関係資料目録内の番号）、②受入年月日、③受入方法（受贈、移管、購入などを分類）、④寄贈者、⑤表題、⑥編集者（資料作成者名）、⑦発行年月日（西暦）、⑧大きさ、⑨形態および数量（冊、枚、部、点で表記）、⑩備考である。

以上の目録の原簿は、ペーパーシートを作成し手書きで書入れファイリングしたが、ある程度蓄積した段階でデータベース化し、いずれ検索機能も付すつもりでいる。資料提供、公開のために急がれるが検索システム構築までにはいたっていない。データベース化を行ったソフトは現段階ではエクセルを使用し、メンテナンスはすべて内部で行っている。個人情報チェックなどを施した上で、いずれ公開したいと作業を進めている。

#### （４）公開——企画展・シンポジウムとのタイアップ

藤田たき関係資料は、二〇〇二年度企画展「女性の教育と地位向上にささげた 藤田たきの生涯」および、同年

シンポジウム「世界にはばたく 各界の六人がパイオニア藤田たきを語る」<sup>10</sup>を通じて公開した。せつかくの新着資料を「お蔵入り」させては宝の持ち腐れになりかねない、広く大学史や女性史に関心をもってもらえたら、という気持ちからであった。

また広く一般公開することで、観覧の方々に資料自体への関心や重要性の認識も喚起できたという思いもあった<sup>11</sup>。実際に見学の卒業生から「これ（学生時代に使用した授業ノート）なら私も持つてるかもしれないわ。機会があつたら持つてくるわ」と嬉しい言葉を頂いた。資料の元保有者と預託者にも来室いただき、シンポジウムにはゲストまたパネリストとして出演していただいた。整理状況をお知らせするとともに、資料室業務の理解をいただくためでもあった。

また企画展やシンポジウムなど他作業と抱き合わせれば、資料収集作業にかかる費用を正当に流用（？）することも可能になった。この工夫は大変重宝で現在も実践している。

幸い、好評のうちに両公開事業を終了することができ、一〇〇年史編纂の終了した二〇〇三年度最初の資料室委員会で、ひきつづき第二次大戦後を中心に、日米の女性交流史および英語教育史関係資料の所在調査活動を展開することを決定した。女子高等教育史を詳らかにする目的で本学史資料を収集するという方針を貫く意図である。

## 第二章 一〇〇年史編纂の後——女子高等教育史を詳らかにする

一〇〇年史編纂終了後は、女性交流史および英語教育史において本学と縁のあるテーマで、関係資料を広く募ることにした。作業に手間のかかるため、編纂に携わっている間には着手できなかった事情もあつたからである。具

体的には、戦後の海外留学の先鞭をつけ本学卒業生も多く参加した、ガリオアおよび初期のフルブライト文部省派遣女子留学生に関する資料、もう一つには梅子が創設し一九七五年まで二六名の女性を米国に送った、民間の奨学金として重要な役割を果たした日本婦人米国奨学生に関する資料を対象とした。

## 第一節 ガリオア・フルブライト女子留学生関係資料——テーマ別資料収集①

### (1) ガリオア留学

日本の海外留学は、第二次世界大戦により中断を余儀なくされた。戦後、再開の道をつけたのは、ガリオア (Government Appropriation for the Relief Area : 占領地当地救済費) による留学制度である。

一九四八年一月、米政府は一定の資格をもった日本人に対し、米国への留学を許可すると発表したが、円の外貨交換が認められていなかったため、渡航するには相手国からの財政援助が必要であった。教会や民間機関からの援助も大きかったが、大規模で組織的な海外留学の始まりは、米政府資金によるガリオア留学であった。そして一九四九年に始まったガリオア留学は、対日講和条約発効後はフルブライト人物交流計画に引継がれ、形を変えながら現在にいたっている。したがってガリオア奨学金は、戦後の日本人にとって最初の留学機会といってよく、国際的交流の端緒であり、また海外文化の移入のスタートでもあった。

そうした戦後日本社会史に大きな意味を持つガリオア留学には、女子高等教育機関で教育を受けた女性も参加を果たしていた。初年度の参加者五〇人中、女性は二人、いずれも本学卒業生であった。第二回留学では二八一名が渡米、そこには本学卒業生一三名を含んでいた。第三回は四七一人中三八名の卒業生が参加しており、ガリオア最終回・フルブライト第一回留学では、三二四名中卒業生が一六名含まれていた。

## (2) 収集

そうした史実から、彼女たちの留学への経緯や米国生活、また帰国後のライフヒストリーについての資料や情報を、ぜひ収集して保管するべきであるとの認識が共有された。

二〇〇三年五月から、同窓会の情報や当時の新聞記事、文部科学省高等教育局留学生課の情報をもとに本学卒業生のガリオアおよびフルブライト留学生者を調べた。そして彼女たちの中で連絡先のわかる者に手紙を送付し、今回の資料収集の意図を説明し理解を求めるとともに、締め切りを暫定的に九月末日と設定して留学関係資料の提供もしくは拝借のお願いをした。

この結果、二人の方々から一二〇点の資料を拝借した。写真資料を中心に借り入れることができた他、当時使用したノートや渡航許可書、新聞記事スクラップなども受贈した。くわえて、資料に付された資料提供者から室員への書簡も重要な情報源となった。そこには、戦後直後に女性が米国留学するにあたっての志と責任の念、そして不安な気持ちがつづられており、貴重なライフ・ヒストリーが語られていた。一年遅れて渡米した夫とともにベビーシッターやレストランでのアルバイトをしながら夫婦で勉学を続けた者、二歳に満たない子どもを日本において渡米した事を心に留め置きながら、己を奮起させて学業を修めた事など、女性の留学生特有と見られる心情が語られていて興味深い。

## (3) 整理・公開

送られてきた写真資料は、漸次スキャニングをして画像データ化し（JPEG）、CDに焼き付けて保存することにした。写真資料については、ほとんどの提供者たちから原資料の返却希望を受けたためでもある。目録は、資

料の到着順に提供者に番号を付して、提供資料一点一点に枝番号を付した。目録はエクセルで作成している。その際に提供者の書簡に書かれていたコメントも、備考の欄を設けて記録をし、一〇月中に作業を終えている。<sup>⑫</sup>

米国での異文化交流、異文化摂取を終えた彼女たちが、戦後日本の社会づくりに自発的、自覚的に参画した姿が、制度面以外の側面から辿ることのできる資料群となった。これらの資料は、一般公開事業として以下に述べる「日本婦人米国奨学生関係資料」とともに、二〇〇三年度企画展「津田梅子の創設した日本婦人米国奨学金 日本女性に留学の機会を」で公開した。

## 第二節 日本婦人米国奨学生関係資料——テーマ別資料収集②

運営委員会では、二〇〇三年度の重点事業に日本婦人米国奨学生関係資料収集も決定された。戦後の日米女性の交流史について、本学関係者を中心とする日米の女性たちが支えた民間の女子留学奨学基金の歴史を、奨学生の中から把握しなおし、また奨学基金の担った役割について改めて検討する意図である。

### (1) 日本婦人米国奨学金

津田梅子は一八八九年に米国プリンマー大学に留学したが、男性と同等の実力を持つ自立した女性を育成するプリンマー大学の学風に触れ、女子英学塾（現津田塾大学）の構想を固めるとともに、留学の機会を多くの日本女性に与えたいと願い奨学金の資金集めに奔走した。留学時代に深い親交をもったメアリ・H・モリスやM・ケアリ・トマス（プリンマー大学第二代学長）ら志を同じくする米国女性たちの助力を得て、募金活動が進められた。

その奨学金による留学生は一八九三年から一九七五年まで二六名にのぼっている。奨学生たちは大学で学ぶだけ

でなく、米国の家庭生活を知ることができるようなきめ細かな配慮と指導を受ける機会に恵まれた。初期の留学生には松田道（一回姓、同志社女子専門学校校長）、河井道（二回生、恵泉女学園創立者）、星野あい（四回生、第二代本学学長）、藤田たき（七回生、第四代本学学長）らがあり、日本女性の地位向上に寄与した人材を輩出した。日本で女性の大学が認められなかった時代に、その育成を願った梅子の志の結実したものであった。

## （2）収集・整理・公開

日本婦人米国奨学金運営組織は、日米両委員会からなっていた。日本側委員会は本学内にあつたため、その運営に関する資料は資料室に保管されている。また米国側の文書も、奨学金閉鎖後の一九八〇年代に、第二代奨学金委員長のマーギューリー・マツコイ（初代委員長メアリ・H・モリスの孫）から寄贈されている。そこには奨学金設立の経緯、運営に情熱を注ぎ留学生の生活をきめ細かく目配りする日米女性委員たちの往復書簡、留学生の帰国後の活躍を示すなどの貴重な資料があり、いまだ未整理であるがファイリングを施している。

今回は奨学生たちの目から、どのように米国で学業を修め、どのような生活を送り、何を吸収し、帰国後、何をもたらしたかを探ろうとした。存命で連絡先の分かる一三名に、書簡で資料提供をお願いした。

こうして、締め切りの九月末までに五人の方から四〇点あまりの資料が提供され、一人からは資料の散逸した旨の連絡をいただいた。寮や授業などの大学生活、あるいは米国側委員宅でのティーパーティー風景など、生活のいきいきと立ち現れる写真資料が集まった。一九四一年に渡米した第一一回奨学生山口美智子氏からは、ペンシルヴァニア女子園芸専門学校での実習の様子を写真と共に送っていただいた。のち日本に園芸教育を導入し恵泉女学園園芸教育の基盤を作った足跡を辿る貴重な資料である。また帰国後、留学生たちが米国の委員に寄せ書いて送ったバー

スデーカードなど、親交の深さと継続を表す資料もあった。他にも、ご遺族からの寄贈にも恵まれた。津田梅子から贈られた品や写真立てなどの所持品、留学時に集めた新聞記事スクラップ三〇点余が寄贈された。奨学生の大半がプリンマー大学に留学したが、現在でも本学と交換留学協定を結んでいる両校間の、公的・制度的側面にとどまらない多様な歴史をたどることのできる資料の数々である。

拝借した写真資料は、ガリオア・フルブライト女子留学生関係資料と同様、スキヤニングをしてCDデータとして取り込み、目録を作成した。さらに「津田梅子の創設しや日本婦人米国職学金 日本女性に留学の機会を」の企画展で、ガリオア留学生関係資料とあわせ、一八九三年にスタートした奨学金を起点に留学の現状までを追った展示表現を試みた。

### 第三節 今後の課題——学外資料収集活動の円滑化に向けて——

#### (1) 同窓会との連携

資料室の仕事は、本学史を中心とした女子高等教育史を詳らかにするための活動である。そのため戦略的な収集の対象となる学外資料は、創立者やその周辺の人びと、卒業生をはじめとした本学関係者資料が主となる。したがって、創設以来大学の強力な支持母体として機能し、また常に卒業生とのネットワークをその任とする大学同窓会の協力が不可欠となる。

津田塾大学同窓会は、一九〇五年に第一回及び第二回卒業生を中心に創設された。初期には英語会を開き（現在は別団体の財団法人となっている）、収益を本学に寄付し、本学の強力な支持母体としてその運営をよく助けた。同窓会の会員数は現在二万人余にいたり、「会員および会友相互の親睦を深め、知識の向上を図るとともに、母校

の隆盛に力を尽くし、社会に貢献すること」（『津田塾大学同窓会規約』より）を目指している。

規約にもあるとおり、同窓会は卒業生の動向をよく把握し、情報源の機能も果たしている。その成果は、年二回発行の同窓会広報誌『津田塾たより』に反映されている。卒業生の近況を伝え、同窓生諸姉のメッセージを伝えている。

資料室は『津田塾たより』編集に際し集まった卒業生に関する史実情報を、ご本人と同窓会の許可の得られた範囲内での提供をお願いしている。また自身が同窓会理事（広報誌編集担当）を二〇〇三年から二年間務めた経緯から、協力関係が強まった感想をもっている。同窓会百年史ともいえるべき『津田塾たより 同窓会創立百周年記念号』編纂に携った際、会に寄せられた諸資料や情報を会理事会の賛同を得て資料室に移管させていただいたからである。両機関のネットワークはシステム化はなされていないが、今後一層環境を整備していきたいと考えている。

## （2）学外ネットワークにむけて（大学婦人協会など）

大学婦人協会は、アメリカ大学婦人協会日本支部を発展解消して一九四六年一〇月に設立され、戦後に新制女子大学設立運動を牽引した社団法人団体である。男子大学の女子卒業生、および将来女子大学となる可能性のある女子専門学校卒業生を会員に迎え、ルル・ホームズ（GHQの女子高等教育顧問）らの支援を受けて活動を開始し、現在にいたっている。活動の主旨は、人種、宗教の別を問わず高等教育を受けた女性を結合して、女子高等教育の向上と社会生活の改善を図り、国際大学婦人連盟の加盟団体として国際理解と親善とに尽くすことにあり、関係テーマの調査研究と奨学事業などを行っている。

一九九六年に設立五〇周年を迎えた協会は、『大学婦人協会五十史』を刊行した。それに先立ち協会内諸資料の



整理が行われた。個人会員を主とする協会の性格から、資料の散逸も進んでいるとのことであるが、教育刷新委員会に提出した女子教育の改善を記した陳情書など、戦後の新制女子大学の誕生にまつわる豊富な資料が発掘され改めて保存作業が進められているという。

こうした女子大学の誕生や運営を支え、本学関係者の多くも関わってきた機関が、女子大学アーカイブズのハブともいえる機能を果たせるような環境作りを構想できないだろうか。現段階では、大学婦人協会自体が協会内資料の所在調査だけで手一杯であるとのことであるが、いずれは諸女子大学をはじめ関係諸機関の参加できる情報共有データベースを設け、ジェンダーの視点を盛り込んだ近現代教育史への展開に資するアーカイブズネットワークになりえたらと思っている。

## おわりに

以上、学外資料収集の実践について津田梅子資料室の取り組みを再考した。学外資料の収集は、本学史をより多様な視点から再検討することができ、また女性史における客観的な位置付けにもつながり得よう。しかしながら同時に、より厳密な資料批判の必要性がでてきたといえる。資料間の相互関係や意味合いを検討しながら、より豊かなアーカイブづくりを目指したい。

二〇〇四年度以降の取り組みについても簡単に触れたい。二〇〇四年度企画展「星野あいの拓いた道」の際には、校舎の地下室に眠っていた津田塾理科生（一九四三年より一九四八年）の使用した実験用具や、丹下健三氏による図書館（一九五四年竣工）の備品など学内移管もすすんだ。二〇〇五年度「科学する女性たち」では、卒業生

や元教員からなる「津田塾理科を記録する会」<sup>(14)</sup> および「津田塾理科の歴史を記録する会」<sup>(15)</sup> の方々から、アンケート調査結果など貴重な資料を寄贈いただいた。そして二〇〇六年度「メディアと高等教育」では、語学研究所設立当時（一九六〇年）に使用された手製の英語発音図版をシンポジウムの講師（元教員）が持参してくださった。このように、資料収集の必要性が学内外で少しずつ認知されていると自負している。

また資料室運営委員会では、学外資料に目を向けるにとどまらず学内資料のライフサイクルの構築も不可欠であると認識している。「文書取り扱い規則」や「文書保存規定」などを作成し、文書を作成する全部署の、つまり大学組織全体の認知を取り付けることが求められるが、まだ取り組むにはいたっていない。

ともあれ、大学の歴史はその一校の歴史にとどまらず、近現代の学問史、教育史、社会史につながるものであるから、大学アーカイブズの所蔵する資料は、日本近現代史研究の重要な情報発信源となりえなければならない。そのために、限られた予算や保管スペースなどのさまざまな制約の中で、できるだけ効率的に対象資料を収集できるよう、戦略的な業務遂行が不可欠であるといえよう。今後とも、諸女子大学資料室や関係諸機関との連携を築きながら、女子高等教育史の地平を拓きジェンダーの視点を大学史に盛り込んでいけるような資料室活動を展開したい。

最後に本稿は、国立国文学研究資料館史料館（現、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館）主催「二〇〇二年度アーカイブズ・カレッジ長期コース」の修了論文を修正加筆したものである。

指導教官の安藤正人教授には、日常業務に忙殺される筆者の度重なる欠席を大目に見ていただき、自由でかつきめ細かい指導をいただいた。改めて感謝申し上げます。

## 注

- (1) 法人文書や学内発行物など、運営において学内で発生する文書をここで便宜的に「学内文書」と記す。
- (2) 「学内文書」と対照して、創立者の周辺の人びとや元教員、卒業生等の有す個人資料をはじめ、学外で保有されている文書を、便宜的に「学外文書」と記した。
- (3) 寺崎昌男「大学アーカイブズとはなにか」寺崎昌男、別府昭郎、中野実編『大学史をつくるー沿革史編纂必携』東信堂、一九九九年、二〇三頁
- (4) 平田康子「津田梅子先生資料室について」覚書、一九九一年三月
- (5) 企画展は年度毎にテーマを替え企画運営している。通常、卒業生を大学に招くホームカミングデーのある一〇月第一週土曜日を初日としている。
- (6) 二〇〇一年度には「岩倉使節団派遣から一三〇年 最初の女子留学生たち 大山捨松、瓜生繁子、津田梅子」、二〇〇二年度「女性の教育と地位向上に捧げた 藤田たきの生涯」、二〇〇三年度「津田梅子の創設した日本婦人米国奨学金 日本女性に留学の機会を」、二〇〇四年度「女子高等教育のパイオニア 星野あいの拓いた道」、二〇〇五年度「科学する女性たち 津田塾大学 数学・情報科学教育の軌跡」、二〇〇六年度「メディアと高等教育」のテーマで公開している。
- (7) 初年度は資料室単独で企画運営したが、現在は津田梅子記念交流館（学内）と共催。
- (8) 藤田たき先生の論集と思い出世話人会編『ありがとうー藤田たき先生の論集と思い出』ドメス出版、一九九三年
- (9) 福井智佳子「資料整理とコンピュータ利用の可能性をめぐる諸問題」資料⑤六三頁（『研究叢書第二号 年史資料の収集・保存ー一九九九年全国研究会分科会報告 於・金沢大学』二〇〇一年）
- (10) 藤田たきに縁があり各界で活躍する本学卒業生に参集願ひ、藤田たきの残した功績、後進の者へのメッセージを語っていただいた。講師は赤松良子（元文部大臣）、有馬真喜子（ジャーナリスト）、久保田真苗（元経済企画庁長官）、森山眞弓（元法務大臣）、中村ミチ（元大学婦人協会会長）、内田道子（本学名誉教授）（以上敬称略）。

- (11) 鈴木秀幸「資料の調査・収集をめぐる諸問題」全国大学史資料協議会編『研究叢書第二号 年史資料の収集・保存―一九九九年全国研究会分科会報告 於・金沢大学』二〇〇一年
- (12) いずれ閲覧に供することができるよう、個人情報保護の処理含め現在整理に着手した。
- (13) メアリの夫ウィスターはペンシルヴァニア鉄道重役を務め広大な土地所有者だった。夫妻はキリスト教の一派クエーカー教徒の慈善家としても知られる。従兄弟ローランド・S・モリスは第六代駐日大使。(内田道子「メアリ・H・モリス奨学金」飯野正子、亀田帛子、高橋裕子編『津田梅子を支えた人びと』有斐閣、二〇〇〇年)
- (14) 成果は津田塾理科の歴史を記録する会編『女性の自立と科学教育―津田塾理科の歴史』ドメス出版、一九八七年にまとめられた。
- (15) 津田塾理科・数学科五〇年史編集委員会編『津田塾理科・数学科五〇年のあゆみ』一九九七年(非売)

## 参考文献

- 亀田帛子「津田塾九〇年小史」創立九〇周年記念事業出版委員会『津田塾大学 津田梅子と塾の九〇年』津田塾大学、一九九〇年
- 澤木武美、鈴木秀幸、中野実、日露野好章、松崎彰「大学史編纂と資料の保存―現状と課題」寺崎昌男、別府昭郎、中野実編『大学史をつくる―沿革史編纂必携』東信堂、一九九九年
- 津田塾大学百年史編纂委員会『津田塾大学百年史』津田塾大学、二〇〇二年
- 寺崎昌男「大学アーカイブズとはなにか」寺崎昌男、別府昭郎、中野実編『大学史をつくる―沿革史編纂必携』東信堂、一九九九年
- 西山伸「京都大学文書館―設置・現状・課題」全国大学史資料協議会西日本部会『研究叢書第三号 大学アーカイブズの設立と運営―二〇〇一年度総会および全国研究会の記録―』全国大学史資料協議会、二〇〇二年
- 日本女子大学成瀬記念館編『成瀬記念館』No.14、一九九八年
- 平田康子「津田梅子先生資料室について」覚書、一九九一年
- 平田康子「津田先生の新資料」津田塾同窓会編『津田塾たより』第三七巻第一号、一九八六年

山口拓史『『大学史』資料室から『大学文書』資料室へ』全国大学史資料協議会東日本部会「研究叢書第六号 大学アーカイブズのこれから―二〇〇四年度全国研究会の記録 於…金沢大学」

全国大学史資料協議会東日本部会「研究叢書第二号 年史資料の収集・保存―一九九九年度全国研究会分科会報告―」全国大学史資料協議会、二〇〇一年

(ひぐち・さやこ 津田塾大学津田梅子資料室)